— 茨城県土浦市 —

東谷遺跡（第１次調査）

—— 住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

２０１３

土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

— 茨城県土浦市 —

東谷遺跡（第１次調査）

—— 住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

２０１３

土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

序

霞ヶ浦の畔にある土浦市は、水と緑に大変恵まれた住みやすい場所です。この恵まれた自然環境を受けて、太古の昔からさまざまな人々の暮らしが営まれてきました。市内に残る集落跡や貝塚、古墳などの遺跡は、往年の人々の様子を私達に伝えてくれる大切な文化財です。

この貴重な文化財を調査・研究するとともに、保護して後世に伝えていくことは、現在の私達にとって重要なことでもあります。今後の郷土の発展を考えていくためにも、しばし振り返って新たな過去を見直すということは、実はとても大切なことであると言えます。

このたび、霞ヶ岡町にある東谷遺跡について行われた、開発行為に伴う記録保存を目的とした発掘調査の記録をまとめることができました。調査の結果は本文に記載しておりますが、これらの資料を土浦市の歴史の解明に役立て、子どもたちの代へも引き継がれるよう充分に活用していきたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行にあたり、御協力・御指導いただきました皆様方に厚く御礼を申し上げます。

平成25年３月

土浦市教育委員会

教育長　井坂　隆

例言

1．本書は、土浦市遺跡調査会が実施した東谷遺跡（土浦市霞ヶ岡町2630－1他所在）〔第１次調査〕の発掘調査報告書である。

2．東谷遺跡〔第１次調査〕は開発事業者である積水化学工業株式会社の依頼を受けて、住宅地造成に伴う事前調査として土浦市遺跡調査会が実施したものである。

3．東谷遺跡〔第１次調査〕は平成２年(1990)５月７日より25日まで実施した。

4．東谷遺跡〔第１次調査〕は中澤達也（当時：土浦市教育委員会社会教育課）が担当した。また出土品の整理は中澤・福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）・村上吉正（國學院大學卒）が担当した。編集及び報告書の作成は石川功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）が担当し、飯塚守人・窪田恵一（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）が補佐した。

5．発掘調査、出土品整理及び報告書の作成については、次の諸機関のご協力・ご教示を賜った。(50音順・敬称略。)

茨城県教育委員会・茨城県県南教育事務所・
土浦市文化財愛護の会・土浦市文化財保護審議会

6．発掘調査時の写真撮影は中澤が行った。

7．執筆及び遺物写真撮影は石川が行った。

8．本書にかかる出土品及び調査記録図面、写真等は一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。出土遺物については、ＫＨの略称を付している。

凡例

1．各遺跡の遺構番号は、基本的に現地調査時に付けたものを踏襲しているが、一部整理作業の過程で見直しを行い変更したものもある。

2．本書の遺構・遺物の指示は次のとおりである。

(1) 水糸レベルは海抜高度を示す。

(2) 遺物番号は、本文・挿図・表・写真図版とも一致する。

(3) 遺跡内の遺構等の略称は次のものを用いた。

ＳＤ：溝　ＳＩ：竪穴住居跡

Ｐ：住居内のピット　Ｋ：攪乱

(4) 遺構・遺物の実測図中の表示は次のとおりである。

炉跡：　焼土（炉跡以外）：

炭化物：

推定：点線

上記以外は注釈を付して任意の表示を行った。

(5) 挿図の実測図は次の縮尺を基本としている

・遺構平面図・断面図：１／60

・遺物実測図：１／４（土器類）

これ以外の縮尺の図面もあり、それらについてはスケールを変えてある。

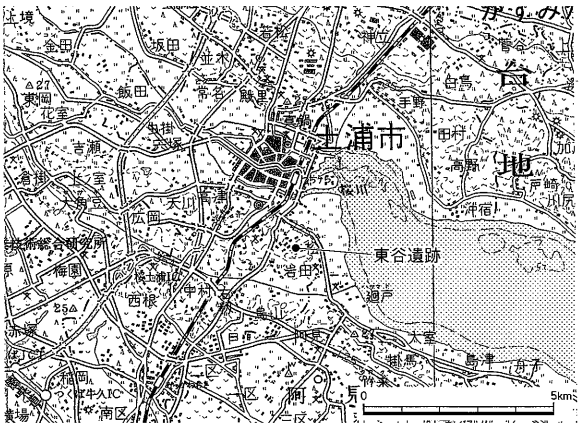
(6) 竪穴住居跡の「主軸方向」は、炉、柱穴などの位置から主軸を決め、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。

例（Ｎ－５°－Ｗ）

(7) 遺物観察表について、表中のＡは口径、Ｂは器高、Ｃは底径・裾径を示す。( ) の数値は現存値であり、〔 〕は回転復元径である。

3．下記の掲載遺跡位置図及び第10図については、国土地理院発行１:200,000地勢図「水戸」（昭和56年編集・平成15年修正・平成17年要部修正）の一部を、また第２図で使用している周辺の遺跡位置図については、国土地理院発行１:25,000地形図「土浦」（昭和52年改測・平成19年更新）の一部を使用し、遺跡位置を加筆したものである。

4．第２図及び表で使用している３ケタの番号は、茨城県遺跡台帳における各市町村登録遺跡番号と同一である。今回掲載した遺跡は旧土浦市域のものであるため、正式には茨城県を示す08及び旧土浦市を示す203を頭に付けた、08－203－085が全国遺跡コード番号となる。



東谷遺跡位置図

土浦市遺跡調査会組織（平成２年度）

会　長
　永山　正（土浦市文化財保護審議会長）
副会長
　青木利次（土浦市教育委員会教育長）
理　事
　茂木雅博（土浦市文化財保護審議会委員）
　雨貝　宏（土浦市都市計画部建築指導課長）
　横田紀夫（土浦市産業部耕地課長）
監　事
　藤枝　正（土浦市教育委員会教育次長）（～H2.9）
　二野屏昌男（土浦市教育委員会教育次長）（H2.10～）
　廣田宣治（土浦市企画部企画課長）
幹　事
　田中紀夫（土浦市教育委員会社会教育課長）
　岩沢　茂（　　同　　社会教育課課長補佐）
　加倉井藤雄（　同　　社会教育課文化係長）
　石山淳一（　　同　　社会教育課係長）
　塩谷　修（　　同　　土浦市立博物館学芸員）
　石川　功（　　同　　社会教育課主事）
　黒澤春彦（　　同　　社会教育課主事）
　中澤達也（　　同　　社会教育課主事）

調査参加者

（肩書は全て発掘調査・整理作業当時のものである）

発掘調査

中澤達也（土浦市教育委員会社会教育課主事）
関口　満（土浦市教育委員会社会教育課臨時職員）
石山春美　岡田年子　中村節子　長嶺道子

整理作業

中澤達也
石川　功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）
福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）
窪田恵一（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）
村上吉正（國學院大學卒）
飯塚守人（筑波大学大学院・上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）
石山春美　岡田年子　中村節子　長嶺道子

目次

序
例言　凡例
土浦市遺跡調査会組織（平成２年度）　調査参加者
目次　挿図目次　表目次　写真図版目次
第１章　調査に至る経緯……1
第２章　遺跡の環境……1
第３章　発掘調査の経過……3
　(1) 調査区の設定
　(2) 調査日誌抄
第４章　発掘調査の概要……4
　(1) 検出の状況
　(2) 発見された遺構と遺物
　　①竪穴住居跡
　　出土遺物
　　②溝跡
　　③遺構外出土遺物
第５章　考察……12
第６章　総括……15
報告書抄録……16
写真図版

挿図目次

第１図　調査場所位置図……1
第２図　周辺の遺跡……2
第３図　試掘調査トレンチ及び調査区位置図……3
第４図　調査区全体図……4
第５図　SI-1・SD-2　平面・断面図……6
第６図　SI-1　遺物出土状況……7
第７図　SI-1　出土遺物……8
第８図　SD-1・SD-3　平面・断面図……11
第９図　遺構外出土遺物……11
第10図　土浦入り周辺における古墳時代前期の主な集落遺跡と古墳位置図……12
第11図　土浦市内から出土した北陸地方の影響を受けた土器……13

表目次

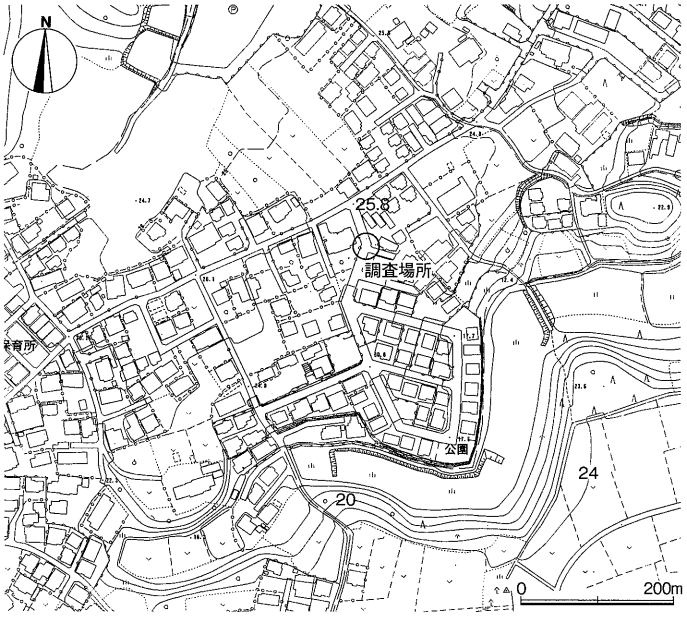
第１表　遺跡対照表……2
第２表　出土遺物観察表……9
第３表　遺構外出土遺物観察表……11
第４表　土浦入り周辺における古墳時代前期の主な集落遺跡と古墳……12

写真図版目次

PL. 1: 調査前全景　遺構確認状況　SI-1検出状況　SI-1遺物出土状況　№1・6出土状況　№8出土状況
PL. 2: №4・8出土状況　№2出土状況　№2・9出土状況　№4出土状況　№7出土状況　SI-1完掘(1)
PL. 3: SI-1床面焼土　SI-1土層断面(部分)　SI-1完掘(2)
PL. 4: SD-1検出状況　SD-1土層断面(1)　SD-1土層断面(2)　SD-1完掘　SD-2完掘　SD-3完掘
PL. 5: 出土遺物(1)
PL. 6: 出土遺物(2)

第１章　調査に至る経緯

平成元年(1989) ９月18日に、開発者の積水化学工業株式会社代表取締役廣田馨氏より土浦市に対して、霞ヶ岡町2630－１他における住宅地造成に伴う開発行為事前協議申請書が提出された。そのため土浦市教育委員会において当該申請地における埋蔵文化財の有無について確認したところ、一部が東谷遺跡（当時県遺跡番号5248・市遺跡番号B－３：現市遺跡番号085）に該当し土器片の散布が見られるほか、開発予定地の大部分を占める山林については現状では埋蔵文化財の有無が確認できないので、開発行為の着手前に試掘確認調査が必要となる旨回答を回答した。計画の進展に伴い、平成２年（1990）４月10日に事業者の協力のもと試掘調査を実施したところ、予定地北側において竪穴住居跡などが確認されたが、山林部分では遺構が検出されなかった。そこで検出された遺跡の保護について協議が行われたが、遺構検出箇所は開発地の進入路であり現状保存は難しいことから、発掘調査による記録保存を取ることで事業者と合意した。そのため同４月24日付けで文化財保護法第57条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘届を進達し、同５月１日付で文化財保護法第98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査通知を提出して５月７日より発掘調査を開始した。



第１図　調査場所位置図

第２章　遺跡の環境

東谷遺跡は桜川南岸・霞ヶ浦西岸の筑波稲敷台地の標高約25mの台地上に存在する。遺跡の周囲は桜川・霞ヶ浦につながる谷津が大変発達した地形であり、遺跡は東の霞ヶ浦から侵入する谷津を南に臨む台地上に位置している。

旧石器時代の遺跡は土浦市内でも花室川流域をはじめ近年確認例が大変増えている。ただし、本遺跡の近隣の調査事例では現在のところ確認されていない。

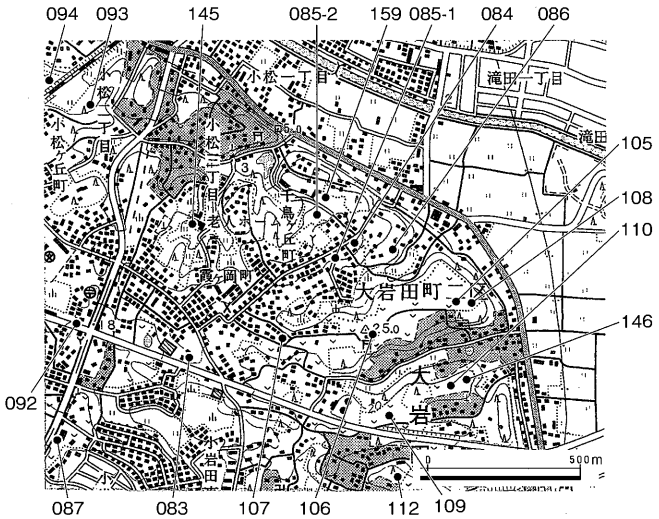
縄文時代については、早期の土器が内根Ａ遺跡(2008年一部確認調査)で確認されている。また東谷遺跡(第２次：1997年調査）では茅山式・浮島式の土器片が出土した。中期は霞ヶ岡遺跡、霞ヶ岡北遺跡、内根Ｂ遺跡などで、後期は内根Ｂ遺跡で土器片が確認されている。

弥生時代については、内根Ａ遺跡で弥生時代後期の土器片が採集されている。

古墳時代になると遺跡の数が増加し、本遺跡の他に、霞ヶ岡遺跡、霞ヶ岡北遺跡、内根Ａ遺跡、内根Ｂ遺跡、木曽遺跡、木曽北遺跡が確認されている。房谷遺跡（1990年調査）では古墳時代後期の竪穴住居跡1軒が調査されており、内根A遺跡からも竪穴住居跡が確認されている。ただし確認されている遺跡の大半は古墳時代後期であり、前期は本遺跡が目立つ程度である。古墳では、三芳古墳（1997年一部調査）は径約34m、高さ3.3mの円墳で、出土埴輪・土師器等から中期の古墳と考えられる。ひさご塚古墳は現在後円部径約20m、高さ３ｍを残す前方後円墳であるが、形象埴輪（馬）の破片が採集されており後期の古墳と考えられる。中内山古墳群は円墳６基から成る古墳群で、昭和３年以前に多数の管玉が出土したとの記録がある。また本遺跡に隣接した小舌状台地の先端部には径約15m、高さ1.6mの円墳である霞ヶ岡古墳が存在する。

奈良・平安時代については、霞ヶ岡遺跡、霞ヶ岡北遺跡、内根Ａ遺跡、内根Ｂ遺跡、内根Ｃ遺跡などで土器片の散布が確認されている。

中・近世の遺跡としては、土坑や溝が確認された霞ヶ岡遺跡（1996年一部調査）や、近隣に館跡の存在が推定される木曽北遺跡・大岩田貝塚などがある。また、小松３丁目の二十三夜尊には木造阿弥陀如来立像・木造薬師如来坐像及び両脇侍像（鎌倉時代：どちらも市指定文化財）がある。



第２図　周辺の遺跡

第１表　遺跡対照表

番　号	遺跡名	番　号	遺跡名
085-1	東谷遺跡（１次）【今回調査】	105	内根Ａ遺跡
		106	内根Ｂ遺跡
083	霞ヶ岡遺跡	107	内根Ｃ遺跡
084	霞ヶ岡北遺跡	108	ひさご塚古墳
085-2	東谷遺跡（２次）	109	木曽遺跡
086	霞ヶ岡古墳	110	木曽北遺跡
087	内出後遺跡	112	中内山古墳群
092	桜ヶ丘古墳	145	房谷遺跡
093	小松遺跡	146	大岩田貝塚
094	池の台遺跡	159	三芳古墳

参考文献

長南倉之助1928「常南地方の古墳副葬品について」『新修』28号　土浦第一高等学校

土浦市史編さん委員会1975『土浦市史』

土浦市教育委員会1984『土浦の遺跡』

上高津貝塚ふるさと歴史の広場1998『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第3号

土浦市教育委員会1998『三芳古墳・東谷遺跡2次』

土浦市教育委員会2009『土浦の文化財』

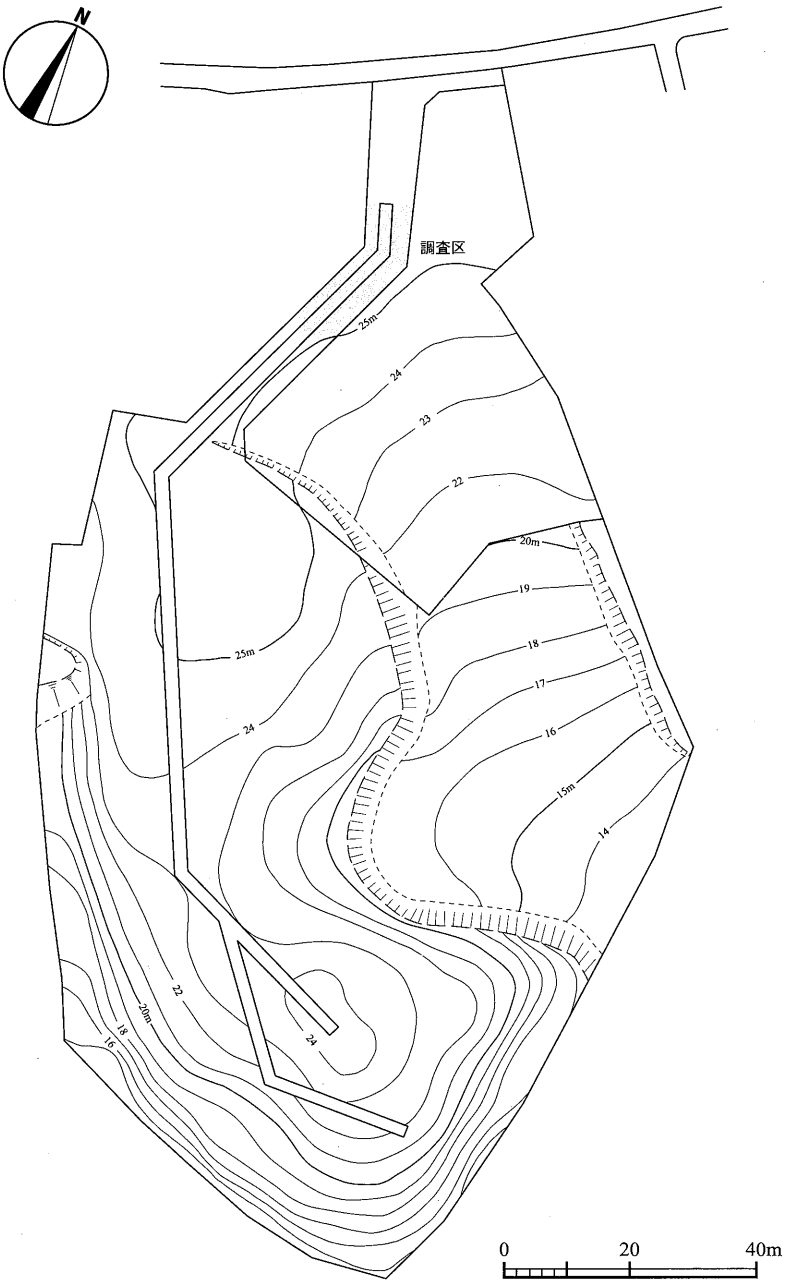
上高津貝塚ふるさと歴史の広場2010『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第15号

土浦市教育委員会2011『浅間塚西遺跡・房谷遺跡・内出後遺跡（第１次調査)』

第３章　発掘調査の経過

(1) 調査区の設定

本開発地については、北側が東谷遺跡に該当するほか、南側の山林部には小舌状台地があり古墳が存在する可能性も考えられた。そこで平成２年（1990）４月10日に試掘確認調査を行ったが、北側の進入路部分では遺構が確認されたものの、小舌状台地部では遺構が確認されなかったため、遺構が確認された東西約22.5m×南北約8.5m（調査面積約99㎡）の範囲の表土を重機によって除去し、発掘調査区とした。



第３図　試掘調査トレンチ及び調査区位置図

(2) 調査日誌抄

平成２年（1990）

５月７日　調査開始。

17日　２号溝南北ベルト図化。

18日　１号溝東西セクション図化。

22日　３号溝東西セクション図化。

23日　１号住居跡　ピット３・５・６エレベーション、炉跡図化。

24日　ピット１・２エレベーション、２号溝南北セクション図化。

25日　調査終了。撤収。

第４章　発掘調査の概要

(1) 検出の状況

確認調査で遺構の検出された北側進入路部分を工事範囲に合わせて拡幅し、表土除去及び遺構確認を実施したところ、調査区の南側で竪穴住居跡１軒〔SI-1〕、溝跡１条〔SD-2〕、北側で溝跡２条〔SD-1・3〕を検出した。

(2) 発見された遺構と遺物

① 竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡〔SI-1〕（第５～７図　PL. １～３）

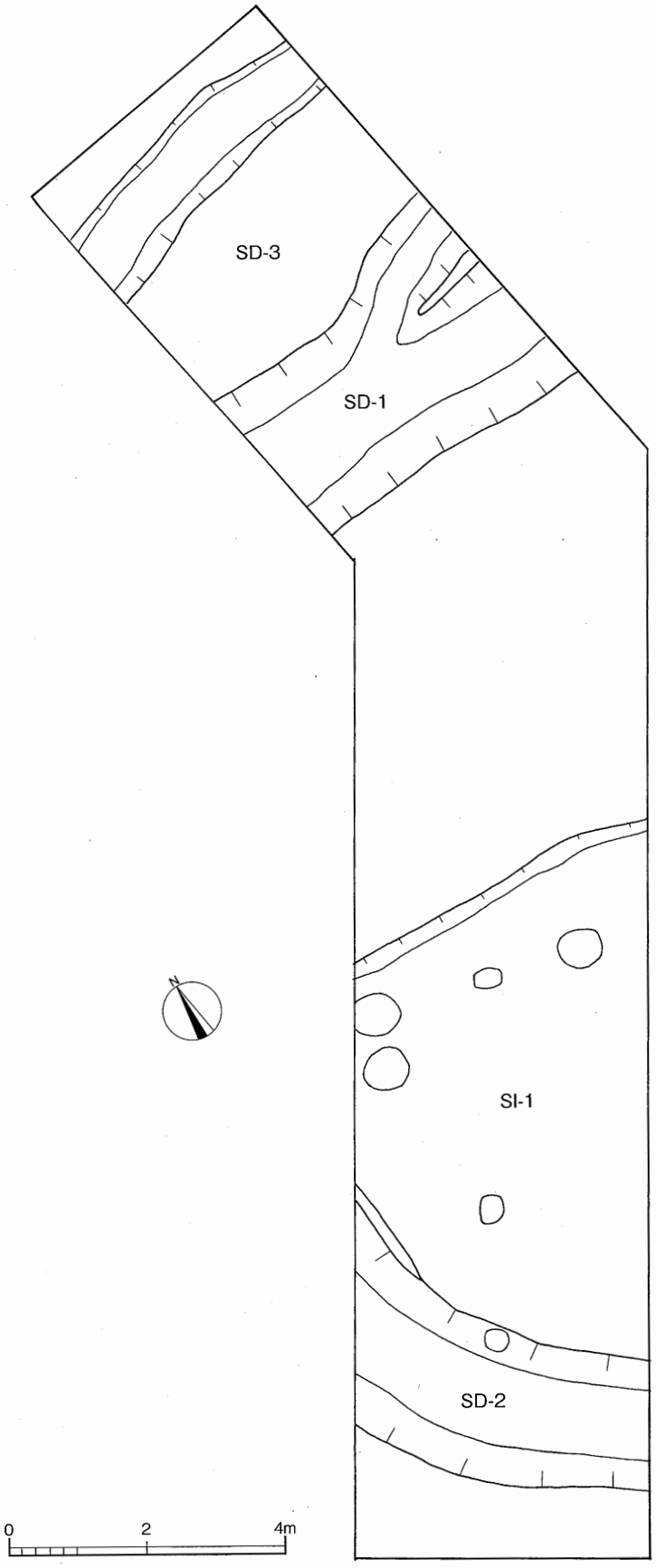
規模・形態：住居跡南側を溝２〔SD-2〕・北東角先端部を攪乱によって失われ、また東側約４分の１・北西側角部が調査区外となるため形態的には不明な点が残るが、主軸長（現存値）約6.35m、幅（現存部からの推定値）約5.75mを測る。方形と思われるが、やや長方形となる可能性もある。

主軸方向：　N－1　°－W

覆土：住居跡に堆積した覆土は12層に大別される。11・12層はP7の覆土である。堆積土の特徴や堆積の状況から見て自然埋没と考えられる。

壁：攪乱及び溝２による未確認部を除き、遺存の良いところでは壁は急激に立ち上がっている。壁溝は西側では確認されているものの、北側では確認されていない。確認された壁溝は幅約20cmである。

床：床面はよく踏み締められている。A－A´のセクション面で見る



第４図　調査区全体図

と、中央部がやや窪み周囲がやや高いが、他の場所では明確ではない。またB－B´のエレベーションではP5～P3間の床面がやや南に向かって下がっている。住居跡床面には北寄りに主柱穴２と炉跡１、ピット２が、南側でピット３が確認された。また北壁際には焼土の、炉の東・西脇に炭化物の堆積が見られた。

炉：中央部やや北寄り、P1－P2間で確認された。形態は南北約80cm×東西約50cm、深さ約５cmの長楕円形状を呈し、よく使い込まれて底面が硬化している。中から土師器甕（第７図－７）が口縁部を下にした状態で出土した。

柱穴：P1・2は主柱穴である。南東側・南西側の主柱穴は未確認で、南東側は調査区外に、南西側は溝１によって失われた部分に存在した可能性が考えられる。P1・2の規模はともに上面径で約50～70cm、床面からの深さ約55～65 cmで、２段掘り状を呈し、底面は柱痕状に細く径が小さくなる。ただし断面観察では柱痕が明確ではないので、廃絶時に抜き取られた可能性も想定される。

ピット：P3は炉の北側で確認されたもので、長軸約40cm×短軸約30cm、深さ約10cmの楕円形のピットである。P4はP1の北側で確認されたもので、西端が調査区外となっているため不明な点もあるが長軸約70cm×短軸約60cm、深さ約５cmの楕円形のピットである。P5は中央部で確認されたもので、長軸約40cm×短軸約30cm、深さ約７cmの隅丸方形状のピットである。P6は南側の溝１斜面で確認されたもので、長軸約40cm×短軸約30cm、深さ約10cmの隅丸方形状のピットである。一見南西側の主柱穴のようにも見えるが、P2～P1～P6の角度が約100°となり不整であることや、穴の形態がP1・2とは異なるので主柱穴ではないと判断した。P7は調査区南東側端で確認されたものである。東半は調査区外となっているため不明な点もあるが、径約30cm、深さ約20cmの円形を呈すると思われる。覆土は２層から成り、自然埋没と思われる。これらのピットの性格は不明である。

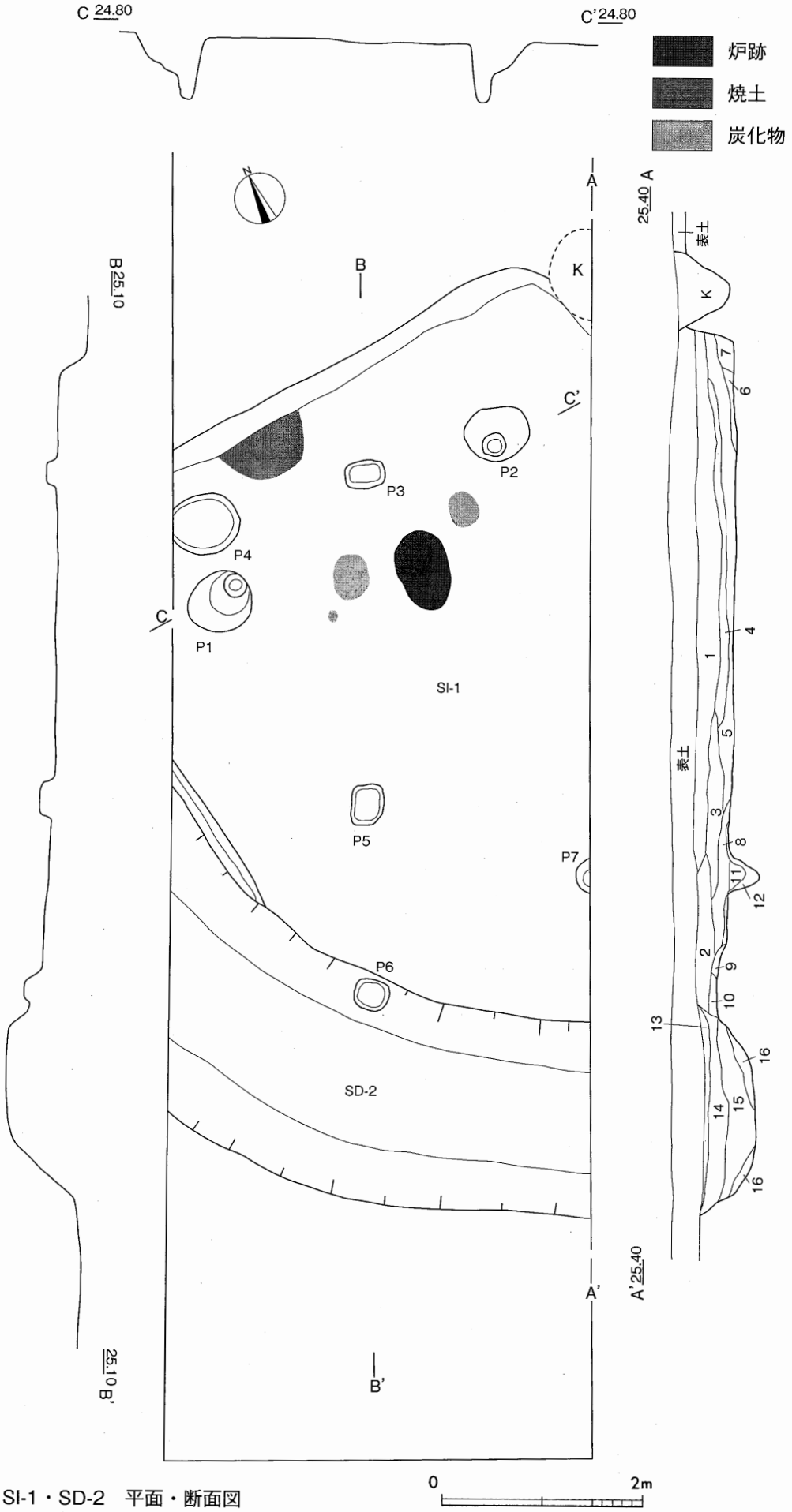
遺物出土状況：本住居跡内で発見されたのは土師器計約16.5kgである。土器は覆土中及び床面から出土しており、平面分布的には中央部から北側に多い。接合関係を見ると覆土下層～床面にかけて散在し、完形になるものはないが、破片が比較的まとまった状態で出土したものもある。出土状況から見て、これらの遺物は本住居跡に伴うものと考えられる。なお11の小型椀は確認調査時に出土したものである。

時期：出土した土器の特徴から、本竪穴住居跡は古墳時代前期のものと考えられる。

出土遺物：出土遺物の中から、11点（台付甕１・甕４・壷１・小型壺１・器台１・高杯２・小型椀１）を図示した。なお、これ以外に土玉なども出土している。

SI-1　土層

	表土	褐色土	粘性・締まりなし。
1	覆土	褐色土	暗褐色土ブロック・ロームブロックを含む。粘性・締まりなし。
2	覆土	暗褐色土	褐色土ブロック・ローム粒を含む。粘性なし・締まりあり。
3	覆土	褐色土	炭化物・焼土粒を微量含む。粘性・締まりなし。
4	覆土	黄褐色土	ローム粒を多め、炭化物・焼土粒を微量含む。部分的に締まりあり。
5	覆土	暗褐色土	ロームブロックを微量、黒色土粒を多めに含む。粘性なし・やや締まりあり。
6	覆土	褐色土	ローム粒を多く含む。粘性なし・やや締まりあり。
7	覆土	褐色土	ロームブロック・ローム粒を均一に含む。粘性・締まりなし。
8	覆土	褐色土	ロームブロックを少量含む。粘性・締まりなし。
9	覆土	暗褐色土	ロームブロックを少量含む。粘性・締まりなし。
10	覆土	褐色土	暗褐色土を多め、焼土粒を微量含む。粘性・締まりなし。
11	覆土	暗褐色土	ロームブロックを少量含む。粘性・締まりなし。
12	覆土	暗褐色土	褐色土、ローム粒を含む。粘性・締まりなし。



第５図　SI-1・SD-2　平面・断面図

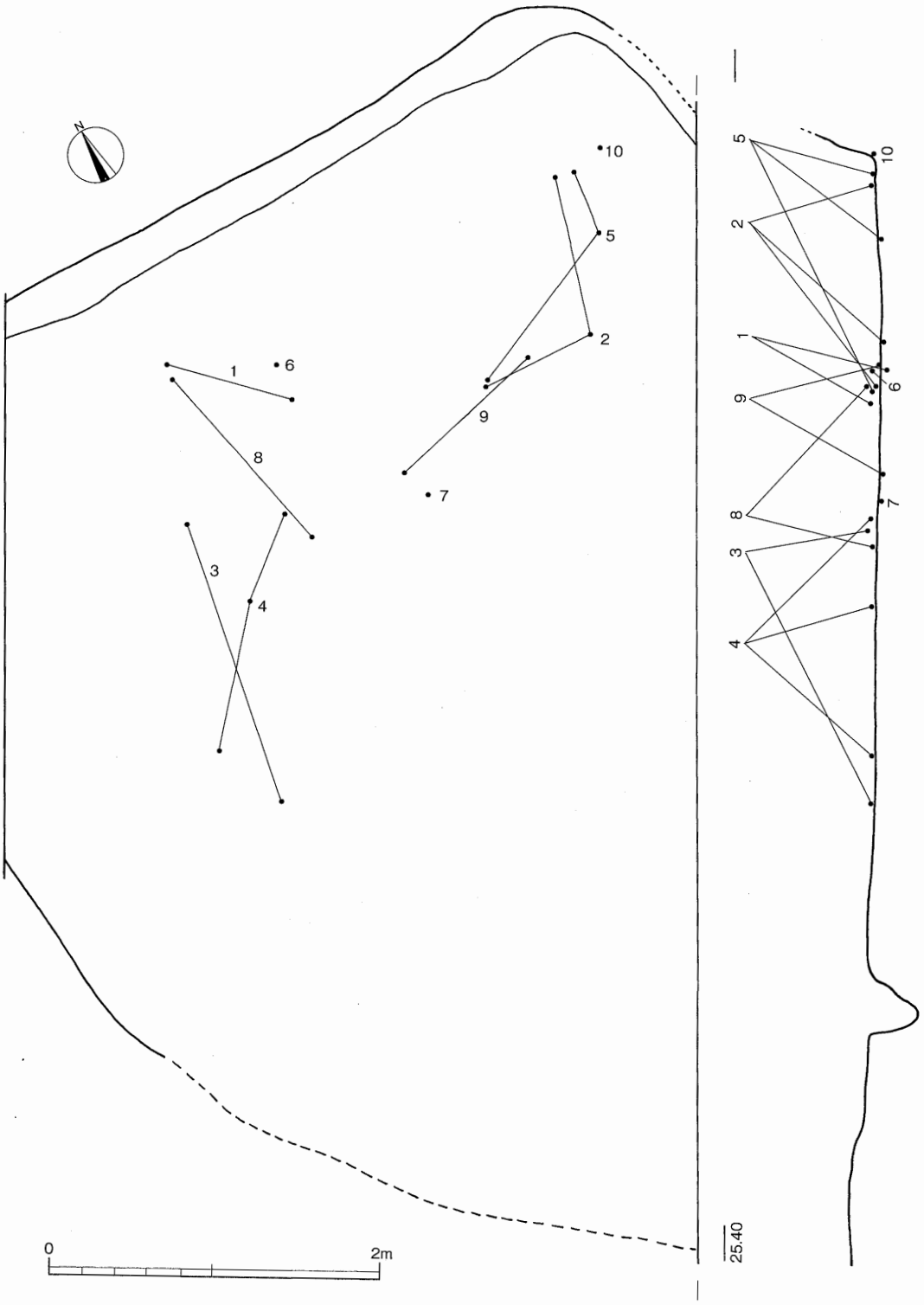
SD-2　土層

13　褐色土　ローム粒を含む。粘性・締まりなし。

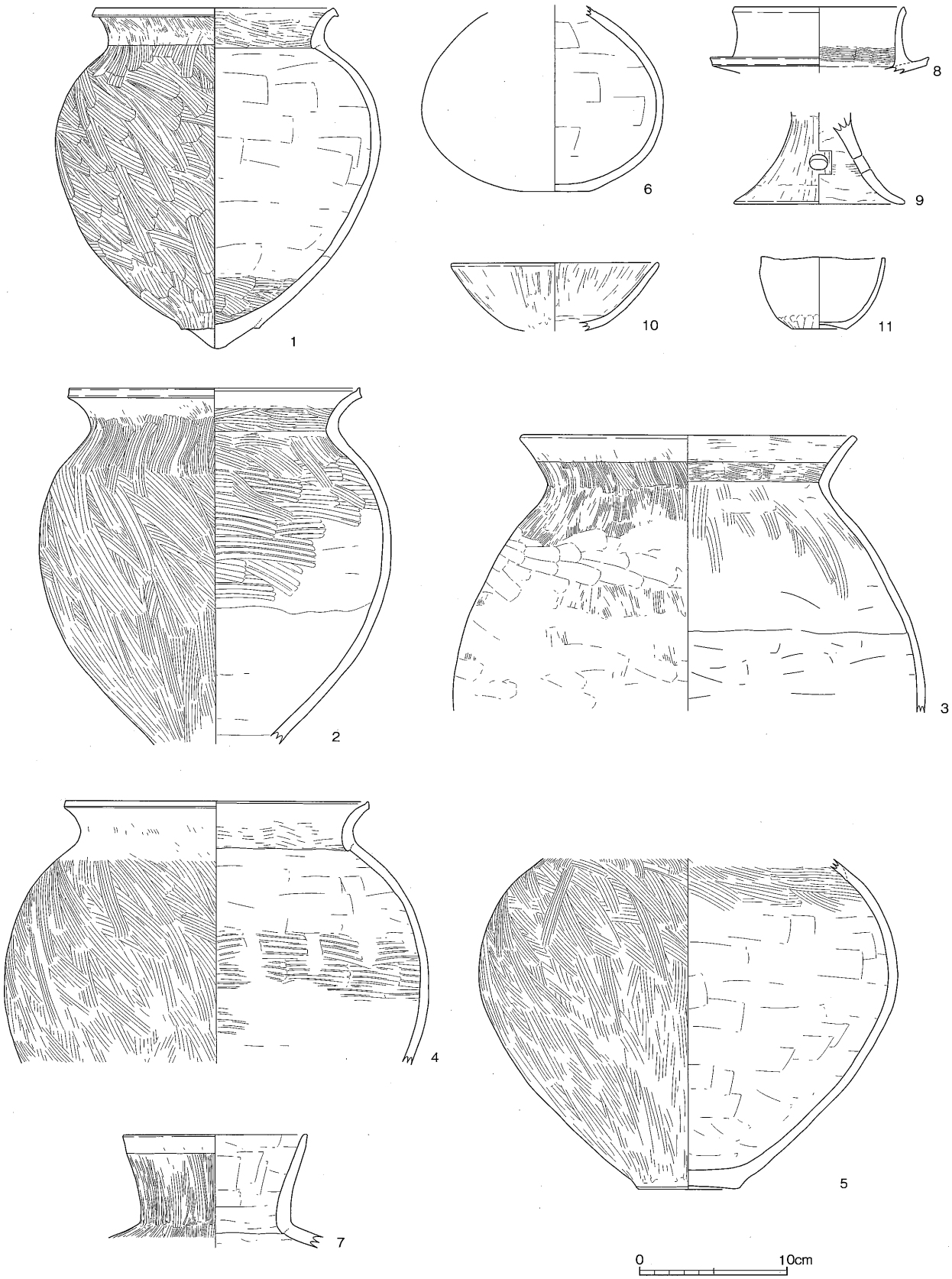
14　褐色土　暗褐色土を含む。粘性・締まりなし。

15　褐色土　暗褐色土ブロックを多め、焼土粒を少量含む。粘性・締まりなし。

16　黄褐色土　ローム粒を多めに含む。粘性なし・やや締まりあり。



第６図　SI-1　遺物出土状況



第７図　SI-1　出土遺物

第２表　出土遺物観察表

図版No.	種類 器種	法量 (cm)	出土位置・ 残存率・焼成	胎土	色調	器形の特徴	整形	備考
1	土師器 台付甕	A:〔17.0〕 B:(23.6) C: −	床面 60% 良好	やや粗 砂粒少量含	暗褐色	口唇端部は斜めに面取りし、やや下垂する	外面：口縁縦ハケ体部斜めハケ、スス付着 内面：口縁・底部横ハケ体部ヘラナデ	口縁1/5〜体部1/2〜脚部欠 1.4kg（石膏含） KH-SI-1-レ3・8・ユ・4区フ・Pit2・4
2	土師器 甕	A:〔20.2〕 B:(24.7) C: −	床面 50% 良好	やや粗 長石砂粒多量含	淡橙褐色	口唇端部垂直に面取り、体部下半はやや直線的	外面：口縁部ハケ目の後横ナデ　頸部〜体部斜めハケ 内面：口唇部横ナデ、頸部〜体部横ハケ。体部下半に炭化物付着	口縁〜胴部1/2・底部欠 1.6kg（石膏含） KH-SI-1-レ1・3・7・Pit 1レ15・17・18・20
3	土師器 甕	A:〔23.2〕 B:(19.2) C: −	覆土下層 30% 良好	やや粗 砂粒多量含	淡橙褐色	肩張り弱く最大径はやや下寄り	外面：口縁部横ナデ、頸部縦ハケ、体部縦ハケの後ヘラ削り・ナデ 内面：口縁部横ナデ、頸部横ハケ、体部ナデの後粗いハケ	口縁〜胴部1/4 0.65kg（石膏含） KH-SI-1-レ5・9
4	土師器 甕	A:〔21.0〕 B:(18.2) C: −	床面 30% 良好	やや粗 砂粒多量含	淡橙褐色	口唇端部垂直に面取り、口縁部はやや短め	外面：口縁部横ナデ、体部：斜めハケ 内面：口縁部横ハケの後ナデ、体部粗い横ハケの後ヘラナデ・ナデ	口縁部1/3〜体部1/2 0.7kg（石膏含） KH-SI-1-レ４・13・26・1区フ・ユ
5	土師器 甕	A: − B:(22.9) C:6.8	床面 40% 良好	やや粗	淡橙褐色	肩張りはやや強め、下半はやや直線的	外面：肩部はやや粗い斜めハケ、下半部はやや粗い縦ハケ、底部ナデ 内面：頸部やや粗い横ハケ、体部ヘラナデ体部内外面に炭化物付着	体部1/2〜底部 1.05kg（石膏含） KH-SI-1-レ1・1土・2・12・25ユ・32・1区ユ・2区フ、SD-2、シ
6	土師器 小型壺	A: − B:(12.9) C:〔4.6〕	覆土下層 50% 良好	やや粗 砂粒少量含	淡黄褐色		外面：体部縦ミガキ 内面：ヘラナデ、底部ミガキ	体部〜底部1/2欠 0.65kg（石膏含） KH-SI-1-レ3・1区ユ・2区フ、SD-2フ・レ3
7	土師器 壺	A:〔12.8〕 B:(7.8) C: −	炉内 10% 良好	やや粗 砂粒多量含	淡橙褐色	口縁部は直線的で垂直気味に立ち上がる	外面：口唇部横ナデ、頸部縦ハケ 内面：ヘラナデ	口縁部のみ1/2 0.35kg（石膏含） KH-SI-1-レ6
8	土師器 器台	A:〔12.0〕 B:(4.6) C: −	覆土下層 10% 良好	やや粗 細砂粒少量含	淡黄褐色	口唇部・鍔部先端斜めに面取り	外面：口縁部ヘラ削り縦ミガキ、頸部：ミガキ。外面赤彩。 内面：口縁部ミガキ、頸部ハケ目	口縁部のみ1/2 0.14kg（石膏含） KH-SD-2フ・レ4、SI-1-1区ユ・フ
9	土師器 高杯	A: − B:(6.3) C:〔11.8〕	床面 25% 良好	やや粗 石英粒子含	淡橙褐色	比較的直線的。丸い透孔３有	外面：ヘラ削りの後縦ミガキ 内面：ヘラ削り・一部横ハケ	脚部のみ1/2 0.12kg（石膏含） KH-SI-1-レ2・6
10	土師器 高杯	A:〔14.4〕 B:(4.7) C: −	床面 25% 良好	やや粗 細砂粒含	淡褐色		外面：ヘラ削りの後縦ミガキ 内面：縦ミガキ	杯部のみ1/2 0.14kg KH-SD-2フ、SI-1-レ1
11	土師器 小型椀	A:8.5 B:5.0 C:3.8	覆土上層 100% 良好	やや粗 長石砂粒含	褐色	口唇端部は水平に面取りされているが、やや波打つ	外面：ハケの後横ミガキ、下部・底部はヘラ削り 内面：横ハケの後粗い縦ミガキ	ほぼ完存 0.07kg KH-シ

② 溝跡

溝１〔SD-1〕（第８図　PL. ４）

位置：調査区北側。

規模・形態：やや不整な直線状。西端では１本であるが中央でY字状に別れ、東端では２本となる。東・西両端は調査区外に延びる。確認された部分で長さ4.2m。幅（西側）2.6m～（東側）1.1m・2.1m。

断面形態：皿状。確認面から深さ約0.6～0.4m。

覆土：３～４層に大別される。自然埋没を示す。

出土遺物：覆土中より土師器を主に縄文土器・弥生土器・須恵器片など約0.9kgが出土しているが、混入と思われる。

時期：不明。

性格：不明。

溝２〔SD-2〕（第５図　PL. ４）

位置：調査区南側。SI-1の南側と重複している。

規模・形態：径約12mの弧状を描きながら両端は東・西調査区外に延びる。確認された部分で長さ4.5m。幅２～2.3m。

断面形態：皿状。確認面から深さ約50cm。

覆土：４層に大別される。自然埋没を示す。

出土遺物：覆土中より縄文土器・土師器・陶器・土師質土器片など約1.65kgが出土している。大半を占める土師器は重複する１号住居跡からの、縄文土器はその他遺構等混入と思われる。

時期：中世・近世と思われる陶器・土器片があるが、確認面出土のため遺構帰属は確定できない。ただし、第１号竪穴住居跡を切って構築されており、同住居跡よりは新しい。

性格：不明。

溝３〔SD-3〕（第８図　PL. ４）

位置：調査区北側。

規模・形態：やや弧を描きながら両端は東・西調査区外に延びる。確認された部分で長さ4.2m。幅0.9～1.2m。

断面形態：やや箱堀状。確認面から深さ約0.25m。

覆土：３層に大別される。自然埋没を示す。

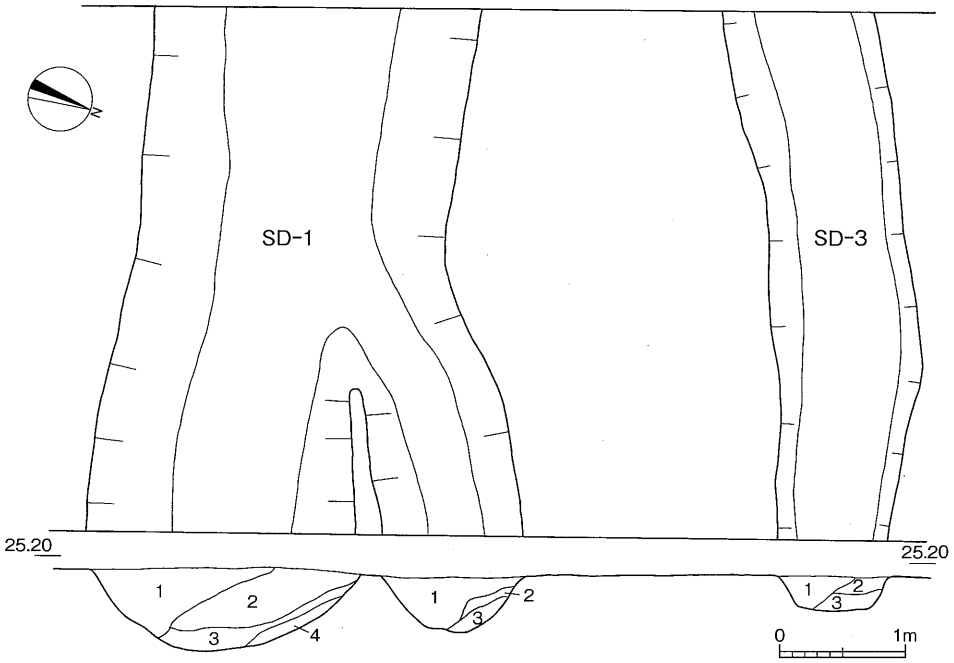
出土遺物：覆土中より土師器を主に弥生土器片など約0.2kgが出土しているが、混入と思われる。

時期：不明。

性格：不明

SD-1・3　土層

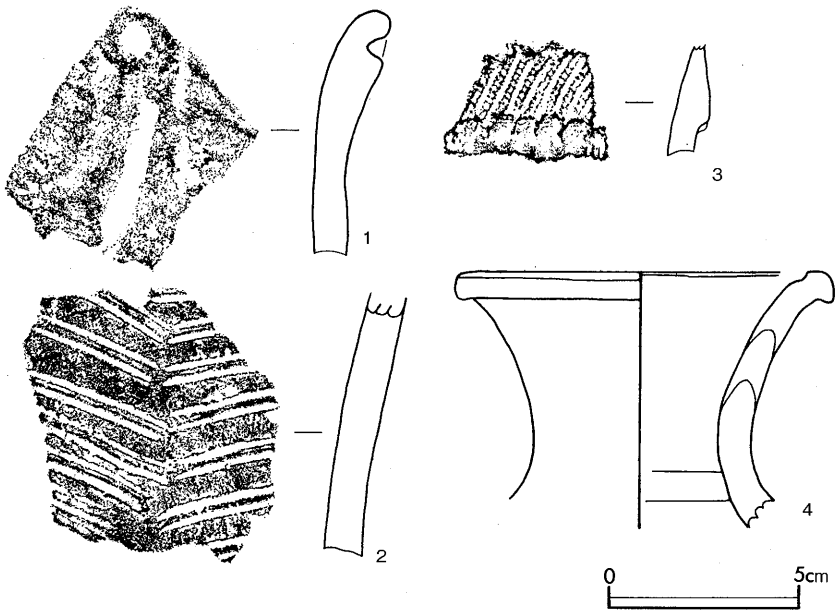
1　褐色土　　粘性・締まりなし。
2　暗褐色土　褐色土をブロック状・ローム粒を少量・焼土粒を微量含む。粘性・締まりなし。
3　褐色土　　暗褐色土粒を多め・ロームブロックを含む。粘性・締まりなし。
4　黄褐色土　ローム粒を多めに、均一に含む。粘性なし・やや締まりあり。



第８図　SD-1・SD-3　平面・断面図

③　遺構外出土遺物

表採や確認調査時等に縄文土器（早・前・後期）、弥生土器、須恵器などが出土している。今回の調査では未検出であるが、近隣にこれらの時代の遺構が存在する可能性がある。



第９図　遺構外出土遺物

第３表　遺構外出土遺物観察表

図版No.	器種種類	胎土	色調焼成	備考
1	縄文土器	長石・石英粒やや多含	暗黄褐色良好	波状口縁堀ノ内式KH
2	縄文土器	砂粒多含	橙褐色良好	浮島式KHヒ
3	弥生土器	長石粒や多含	橙褐色良好	口唇部欠KH-SI-1-1区フ
4	須恵器小型壺	長石粒やや多含	淡灰色良好	口縁部のみ30%KH

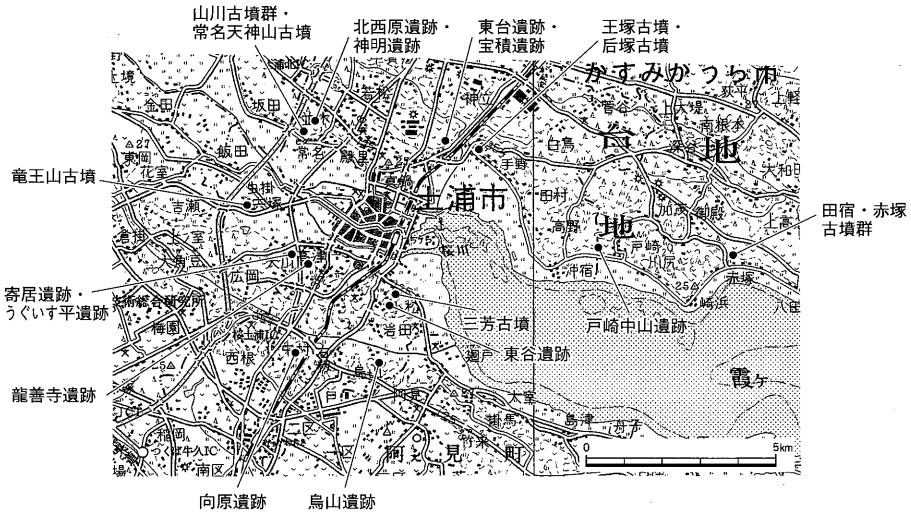
第５章　考察

(1) 土浦入り周辺における古墳時代前期の集落遺跡と古墳の展開について

土浦入り周辺の古墳時代前期の集落としては、桜川北岸の北西原遺跡において隣接する神明遺跡と合わせて120軒以上が発見されているほか、霞ヶ浦東岸の戸崎中山遺跡で85軒、桜川北岸河口部の東台遺跡・宝積遺跡などからも多数の住居跡が発見されている。花室川流域では、向原遺跡において61軒確認されているほか、玉作遺跡として有名な烏山遺跡が目立つ。今回調査した東谷遺跡は、桜川や花室川には面さないものの、小規模な谷津が発達した遺跡立地の地形の特徴は花室川流域と共通するものがある。前期の集落と古墳の位置関係を表にしてみると、比較的集落の近くに古墳が存在するものもあるが、集落の近隣には古墳が見られないところもある。

第４表　土浦入り周辺における古墳時代前期の主な集落遺跡と古墳

地　域	遺　跡　名	遺跡立地	近隣の主要な前期古墳	備考（集落遺跡と前期古墳の距離等）
土浦入り東岸	戸崎中山遺跡	霞ヶ浦に面する台地上	田宿・赤塚１号墳（天神山古墳）〔かすみがうら市〕	距離約3.5km。
桜川北岸	東台遺跡・宝積遺跡	霞ヶ浦に面する台地上	王塚古墳・后塚古墳	古墳は境川の対岸。距離約600m。主に弥生後期～古墳中期の集落。
	北西原遺跡・神明遺跡	谷津奥台地上	山川古墳群・常名天神山古墳	遺跡はやや大きめの谷津の奥、古墳は桜川低地を臨む谷津の出口付近に立地。距離約300～150m。
桜川南岸	寄居遺跡・うぐいす平遺跡	谷津奥台地上	竜王山古墳	距離約1.9km。古墳時代前期の住居跡は寄居遺跡７軒・うぐいす平遺跡14軒。近隣の龍善寺遺跡に９軒。
土浦入り西岸	東谷遺跡	谷津奥台地上	未確認	谷津出口の霞ヶ浦に面する場所に三芳古墳（５世紀前葉）あり。距離約300m。前期古墳は未確認。
花室川流域	向原遺跡	谷津奥台地上	未確認	花室川流域では前期古墳の発見例なし。本来の遺跡規模はもっと大きかったと思われる。
	烏山遺跡	花室川に面する台地上	未確認	１次調査の前期16軒中７軒は玉作工房跡。２・３次調査分にも前期の住居跡27軒あり。



第10図　土浦入り周辺における古墳時代前期の主な集落遺跡と古墳位置図

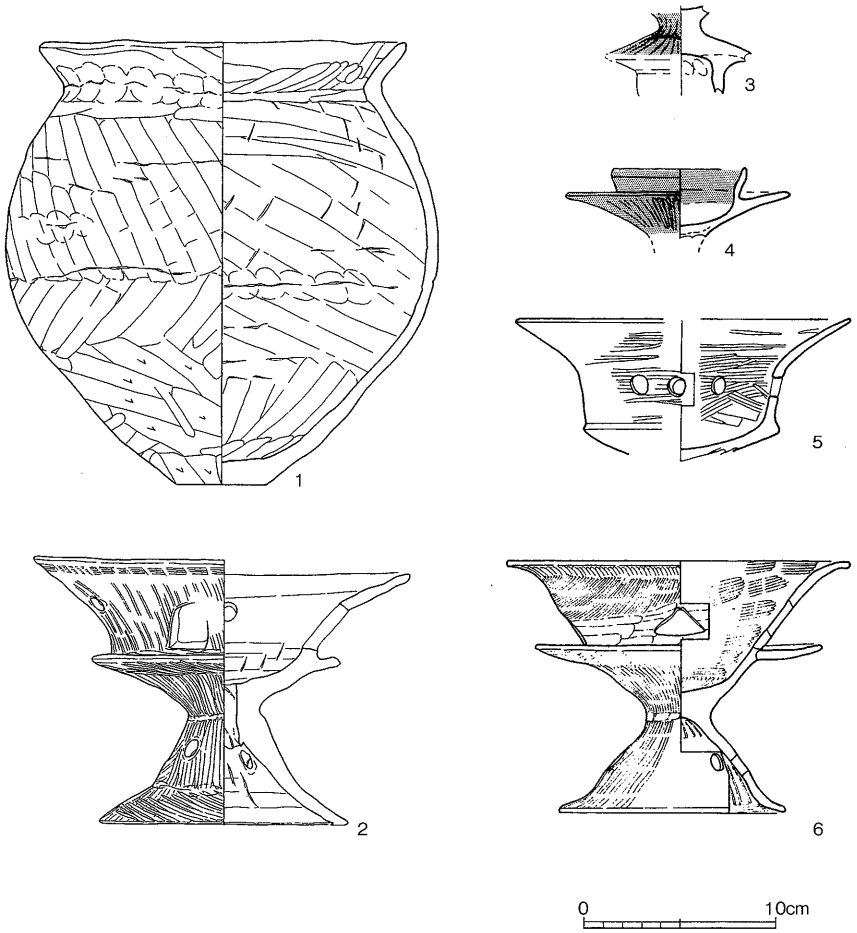
花室川流域における古墳時代前期の集落遺跡の展開について黒澤氏は、谷津の奥まった台地上に多く小規模であることを挙げている(註1)。また土浦市域の前期古墳の立地について塩谷氏は、主水面（主要水系）に面していることを指摘している(註2)。花室川流域や東谷遺跡周辺は樹枝状に発達した谷津は多く存在するものの、広大な河川平野や水面を一望するような場所ではない。小規模な河川に面した谷津奥は小規模な開発には適するものの、古墳時代前期の支配者層が基盤とし発達するのには向かない場所であったことが窺える。

(2) 出土土器について

古墳時代開始期の土器は、広域にわたる「土器交流」が汎列島的な現象としてみられることを特徴としている。そして「外来系」と呼ばれる外部地域に系譜を求めることができる土器が、在地の土器とともに出土する例が知られている。

今回報告した第７図－１・2の土器の「く」の字状の口縁部や、口唇部の面取り、肩部がやや張った形態などを見ると、北陸東部の面取り口縁甕（いわゆる「千種型甕」）の形態に非常に類似している印象を受ける。ただし本来の面取り口縁甕に比べるとやや球胴化していること、底部が先のつぼまった平底ではなく台付である点がオリジナルとは異なっている（２の土器の底部は欠損のため形態不明）。なお５の甕についても口縁部が欠損しており定かではないものの、上半に最大径を持ち平底である形態はより面取り口縁甕に近いものとなる可能性もある。また８の器台についても、このような受部が大きく突出する器台は在地にはないものであり、同様に北陸系の装飾器台（鍔付高杯）の影響である可能性が想定される。

外来系土器の模倣・受容のあり方について若狭氏は、「A地域産の土器がB地域に持ちこまれたもの。搬入品。」をレベル０、「A地域の土器の形や技法をよく守って（まねて）、B地域でつくられた土器。忠実な模倣品。」をレベル１、「模倣品。A地域の土器の雰囲気をまねて、B地域でつくった土器。本来の情報が曖昧になっている。」をレベル２とした３段階モデルを提示している（註3）。この分類を借りれば、今回の土器は形態的



第11図　土浦市内から出土した北陸地方の影響を受けた土器

（1・2：神明遺跡〔第３次調査〕、3：寄居遺跡、4：うぐいす平遺跡、5：戸崎中山遺跡、6：向原遺跡）図は、それぞれの報告書より転載

には比較的「レベル１」に近いものの、本来の面取り口縁甕にはない台付となっている点などから「レベル２」に該当するものであると思われる。本遺跡の他に土浦市内における北陸系土器が出土している例としては、寄居遺跡（註4）の古墳時代前期前半の住居跡より北陸西部の月影式のものと思われる蓋形土器が発見されているほか、神明遺跡（註5）・うぐいす平遺跡（註6）・戸崎中山遺跡（註7）・向原遺跡（註8）でも北陸の影響を感じさせる土器が確認されている。ただしこれらもだいぶ変化が感じられるので「レベル０」のものではなく、「レベル１」または「レベル２」に該当するものかと思われる。

関東地方における北陸系土器の波及について比田井氏は、北陸西部→近江→尾張→三河→駿河→相模湾岸と、北陸東部→東山道→北関東の２ルートが存在すると指摘している（註9）。今平氏は栃木県内における北陸系土器の伝播について、北陸西部のものが見られないことと、北陸東部の土器については比田井氏と同様東山道経由を想定している（註10）。茨城県内における北陸系土器の伝播についてはまだ不明な点が多い。

【註】

（註１）黒澤春彦2009「(2) 花室川流域の古墳時代前期の様相」『中根遺跡－店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』土浦市遺跡調査会　参照。

（註２）塩谷修2010「土浦市域の古墳群」『常陸の古墳群』六一書房　参照。

（註３）若狭徹1998『人が動く・土器も動く　古墳が成立する頃の土器の交流』かみつけの里博物館　参照。

（註４）茨城県教育財団1994『(仮称) 上高津団地建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書　寄居遺跡　うぐいす平遺跡』第84集　参照。

（註５）常名台遺跡調査会2002『常名台遺跡群確認調査　神明遺跡（第３次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第６集　参照。なお、本遺跡出土甕は上膨れ・平底の形態であるが、口唇部面取りは不明瞭であり、外面もハケ調整ではなくケズリとなっている。

（註６）註４と同じ。

（註７）茨城県教育財団2004『戸崎中山遺跡　霞ヶ浦環境センター（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第218集　参照。

（註８）土浦市遺跡調査会1987『向原遺跡－茨城県土浦市向原遺跡発掘調査報告書－』　参照。

（註９）比田井克仁1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号　早稲田大学考古学会　参照。

（註10）今平利幸2012「栃木県における北陸系土器の動向」『東生』第１号　東日本古墳確立期土器検討会　参照。

【参考文献】

茨城県住宅供給公社1975『土浦市烏山遺跡群　土浦市烏山住宅団地造成用地内埋蔵文化財２・３次調査報告書』
土浦市遺跡調査会1987『般若寺遺跡（西屋敷地内）・竜王山古墳　般若寺遺跡（宍塚小学校地内）発掘調査概報』
大川清他1988『茨城県土浦市　烏山遺跡』土浦市教育委員会
茂木雅博他1991「土浦市における古墳の測量」『博古研究』創刊号　博古研究会
塩谷修・茂木雅博1993「土浦市舟塚２号墳（D－59）の調査」『博古研究』第５号　博古研究会
土浦市教育委員会1989『木田余台－茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－』
上高津貝塚ふるさと歴史の広場2001『第６回特別展　弥生から古墳へ　時代の終わりと始まり』
土浦市遺跡調査会2002『木田余台Ⅱ－土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
土浦市遺跡調査会2006『龍善寺遺跡－宅地造成分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
佐々木憲一・田中裕編2010『常陸の古墳群』六一書房
上高津貝塚ふるさと歴史の広場2011『第16回企画展　土浦の遺跡16　ムラの風景くらしの足跡－霞ヶ浦沿岸の古墳時代集落－』
比田井克仁2011「弥生・古墳時代の土器移動類型」『異系統土器の出会い』同成社
森本幹彦2005「古墳出現期における地域間関係－「白江式」の検討を中心として－」『東京大学考古学研究室紀要』第19号

第６章　総括

今回報告した東谷遺跡（第１次）の発掘調査は、短期間・小面積の調査ではあったが、出土品に北陸地方の影響を受けた土師器が見られるなど、霞ヶ浦沿岸地域における古墳時代前期の地域間交流を示す上で重要な遺跡の調査事例であると考えている。

このように狭小な調査範囲であっても、地域の歴史を語る上で重要な資料となるものが発見される可能性は高く、文化財保護・遺跡研究の面からも、小規模な遺跡調査も非常に重要であることを示している。また、そのような小さな発掘調査によって得られた資料も、他の遺跡等との比較検討を行って研究を進めるとともに、知り得た情報を広く発信・公開活用していくことによって地域の宝として認識されるよう、調査を担当する私たちは努めていかなければならない。

なお、今回の遺跡は約20年前の発掘調査であったが、諸般の事情によりずっと報告されずに残ってしまっていたものである。発掘調査時にご協力・ご指導・ご助言いただいた諸関係機関、関係者の皆様に、多大なご迷惑をお掛けした。文末ではありますが、厚く御礼申し上げます。

遺跡調査風景

報告書抄録

ふりがな	ひがしたにいせき（だいいちじちょうさ）
書　　名	東谷遺跡（第１次調査）
副　書　名	住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
編著者名	石川　功
編集機関	土浦市遺跡調査会
所　在　地	〒300-0811　TEL029（826）7111 茨城県土浦市上高津1843　上高津貝塚ふるさと歴史の広場内
発行機関	土浦市教育委員会
発行年月日	西暦2013年（平成25）３月15日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ひがしたにいせき 東谷遺跡	つちうらしかすみがおかまち 土浦市霞ヶ岡町 2630－1	08203	085	36° 03分 37秒	140° 12分 37秒	1990 （平成２）. 05.07～25	99㎡	住宅地造成

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東谷遺跡	集落跡	古墳時代：竪穴住居跡１ 時期不明：溝跡３		土師器	竪穴住居跡から、北陸系の土器が出土

要　約	本遺跡で発見された竪穴住居跡は、溝によって切られているためやや遺存状況は悪いが6.35×5.75mのやや大きめの住居跡である。出土土器には北陸東部の「面取り口縁甕（いわゆる千種甕）」に類似したものがある。ただし直接的な搬入品ではなく、模倣品であろうと思われる。

本書の仕様は次のとおりです

１．紙質：マットコート紙　4/6判70.5kg　（長期保存を考慮し、中性紙を使用）

２．印刷：　オフセット印刷　　写真図版　200線

本報告書の内容について、本文・凡例に出典を明示している図版以外については、文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合には、著作権者の承諾なく本報告書の一部を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。（なお出典を明示した図版等の使用については、別途御確認ください）

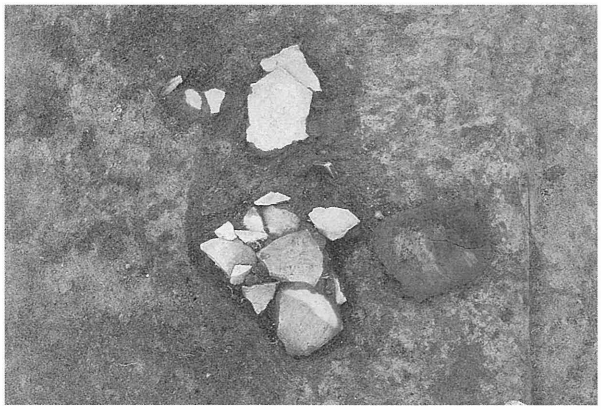
この報告書に係る記録図面類（写真類を含む）を利用する場合は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場に連絡して、必要な手続きをとってください。

調査前全景

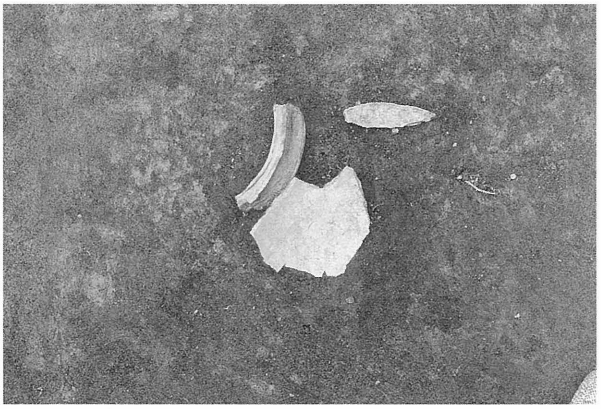
遺構確認状況

S1-1検出状況

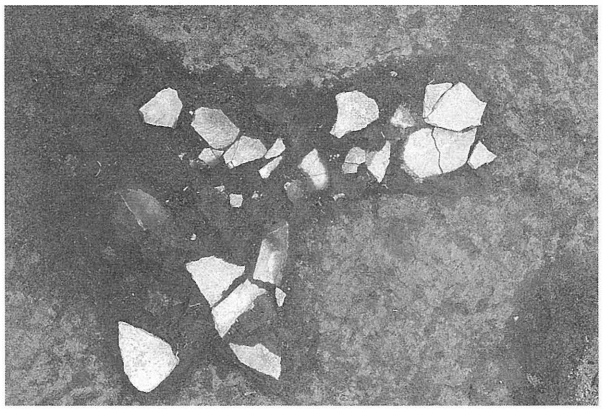
S1-1遺物出土状況



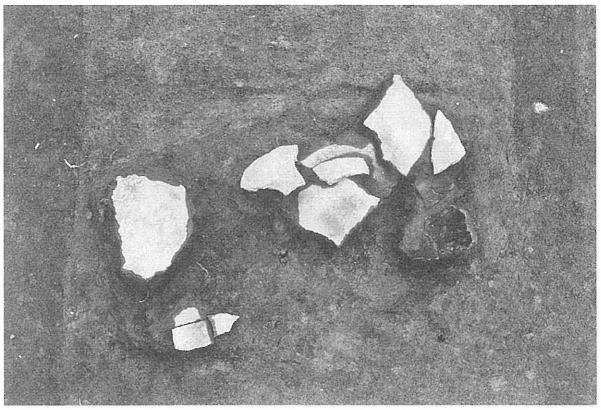
No.1・No.6出土状況



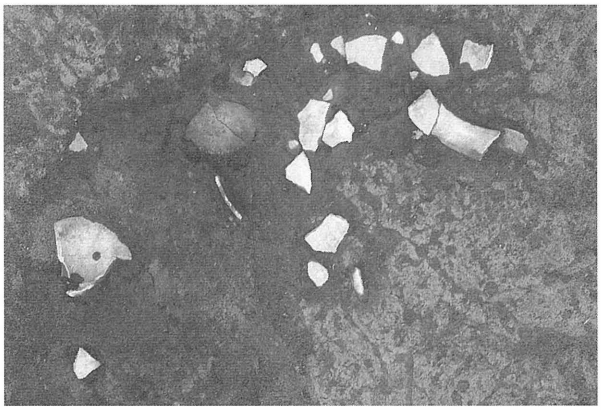
No.8出土状況



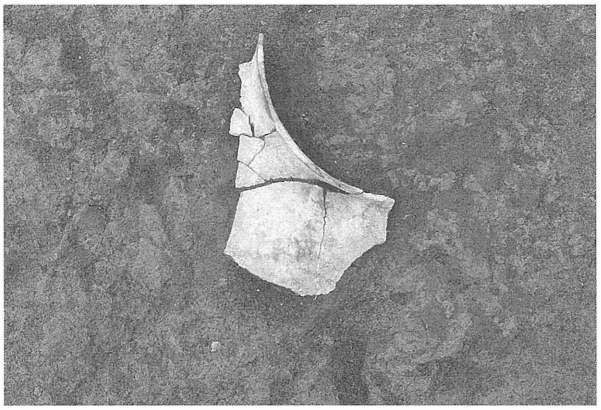
No.4・No.8出土状況



No.2出土状況



No.2・No.9出土状況

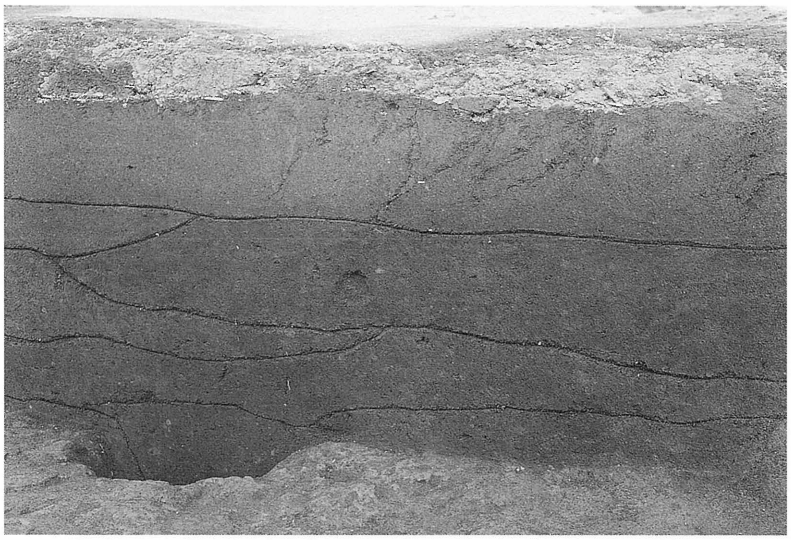


No.4出土状況

No.7出土状況

S1-1完堀（１）　南から

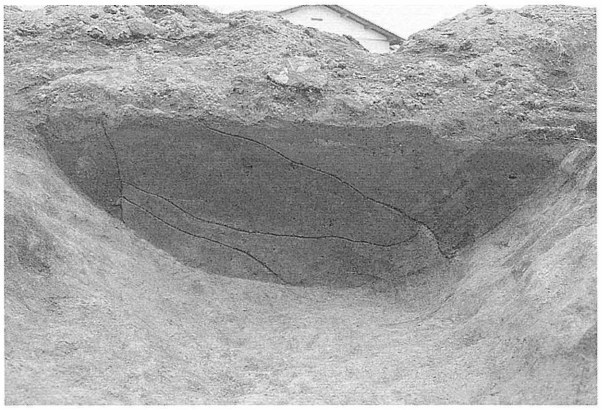
S1-1床面焼土



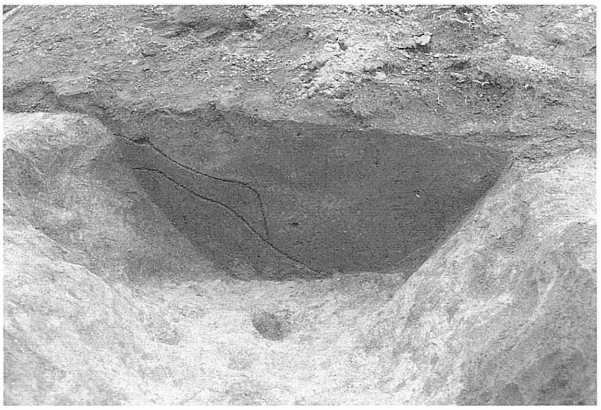
S1-1土層断面（部分）

S1-1完堀（２） 北から

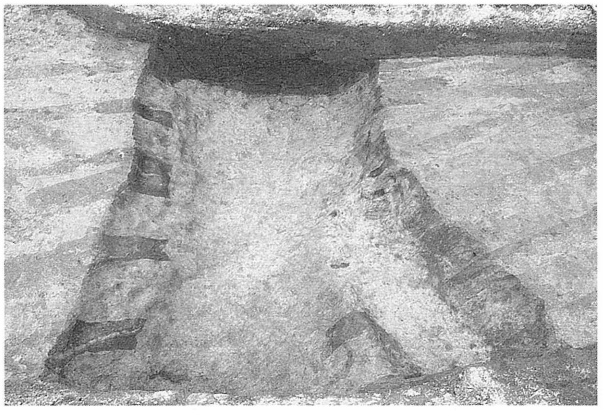
SD-1検出状況



SD-1土層断面（１）



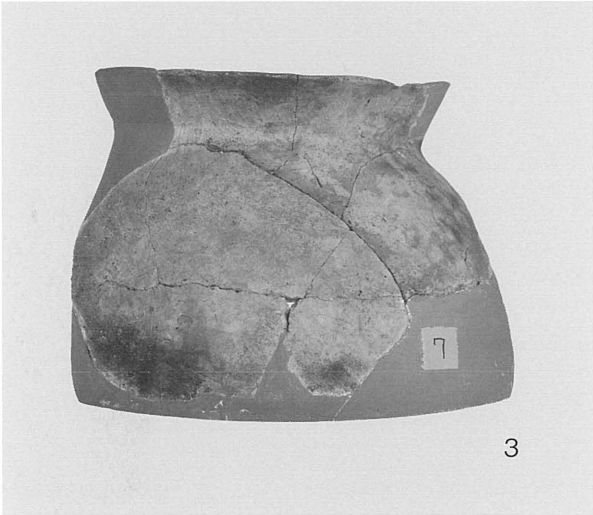
SD-1土層断面（２）

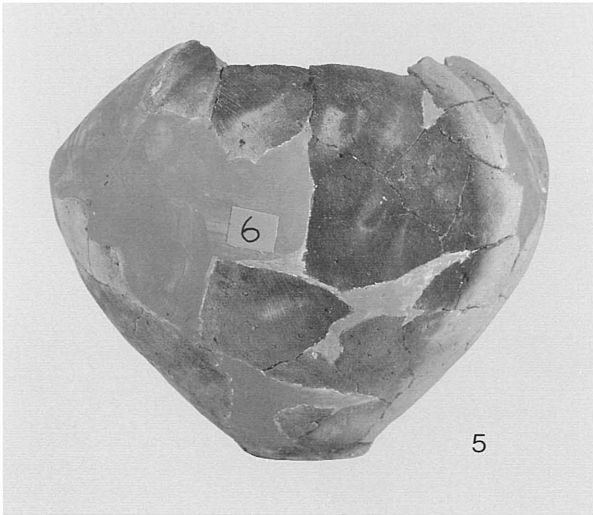


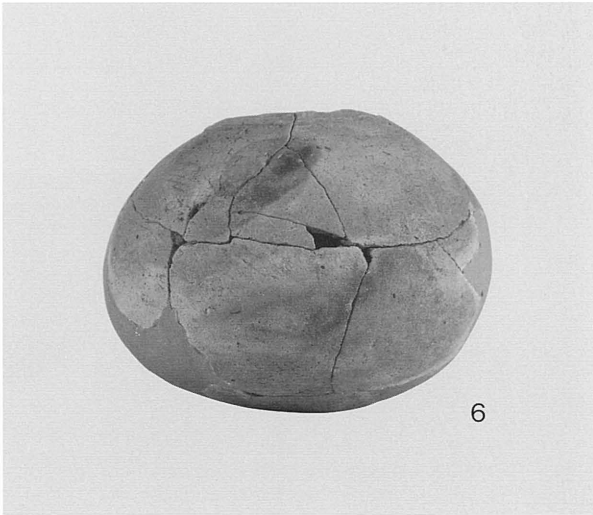
SD-1完堀　北東から

SD-2完堀　南から

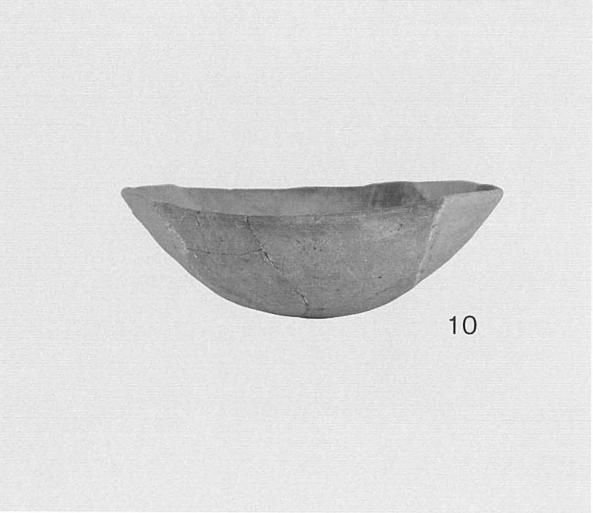
SD-3完堀　北東から

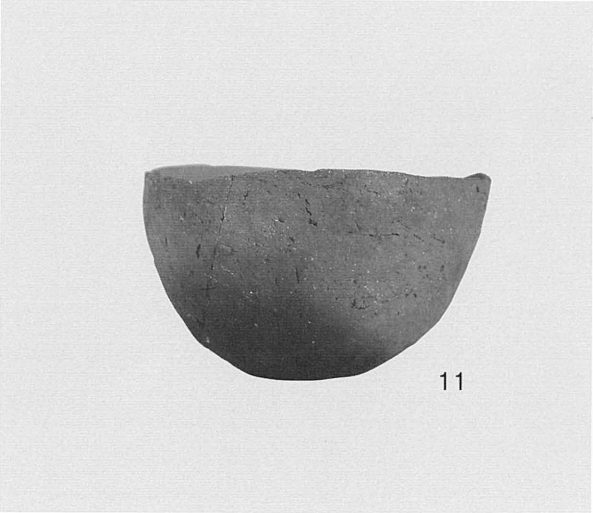






出土遺物（1）





出土遺物（２）

茨城県土浦市
東谷遺跡（第1次調査）
－住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発　行　日　2013年３月15日
編　　集　土浦市遺跡調査会
発　　行　土浦市教育委員会
問い合わせ先　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811　茨城県土浦市上高津1843
TEL 029（826）7111　fax 029（826）6088
e-mail:kaizuka@city.tsuchiura.lg.jp
印　　刷　株式会社　横山印刷

VEGETABLE OIL INK
環境に配慮し、植物油インキを使用しています。